談話室

講演会の内幕

浅野 純次
（経済倶楽部理事長）

▼10月19日、山内昌之・東大名誉教授の講演で遂に4000回を達成しました。この日は会津経済倶楽部から山口豪志理事長、福西物兵衛前理事長など23名の会員が参加され、その際、お祝いの大きな生花をくださったので演壇脇がぐんと華やかになりました。厚くお礼申し上げます。お祝いに栄太楼の紅白饅頭を講演会出席者にお配りしたのですが、山内先生が「私はもらってない」と冗談を言われたので二箱差し上げました。

▼さて騒がしい政局のことでも話題に取り上げればいいのでしょうが、「ド狸（たぬき）が化けた泥鰌（どじょう）は手に余り」「先延ばししても宛（あて）あるわけでなし」「泥濘（ぬかるみ）の得意なドジョウに足とられ」「恥知らぬ人のみ住んで永田村」ぐらいの政局では是非もありません。それより4000回はおそらく日本一でしょうし、世界でも例がないかもしれない（ギネスブックに申請してみましょうか）。今回は四半世紀に一回のことでもあり、記念に講演会の歴史や内幕でもしるしてみましょう。

▼第1回は昭和6（1931）年7月8日。晩餐会で森賢吾（衆議院議員）「国際モラトリウム問題について」でした。第2回は7月24日で、石橋湛山の「マクミラン委員会報告について」と武藤山治の「金解禁後の経済界」。この日は午餐会で、以後、木曜の昼が主体となります。講演のあと会員討論会が行われていました。

▼昭和15年頃から戦時色が強まり始め、昭和19年12月23日の上田良武（海軍中将）「重大化せる比島（フィリピン）戦局」を最後に中断となります。度重なる空襲で講演会どころではなかったでしょう。再開されたのは1年後の昭和21年2月8日。石橋湛山「緊縮政策か膨張政策か」で、戦後の混乱期にいち早く再開した意欲は大したものです。この講演録はちゃんと残っていて、あの時代に「デフレは悪だ、膨張政策により完全雇用を追求すべし」と石橋さんらしい剛直な正論が展開されました。

▼現在に話は飛びますが、講演会が毎週というと大抵の人は驚きます。よく聞かれるのはいつ頃、講師に依頼するのか、で、平均2ヵ月前、ぎりぎりだと1ヵ月前です。早すぎると安心はできてもタイムリーな講演が難しくなります。1、2年に一回は登場する常連講師は数十人、偉そうに言わせてもらえば声がかかるのを楽しみにしておられる大物講師もたくさんおられます。今年は46回のうち初めての講師は9名、女性は4名でした。ドタキャンも時折あり、最近も某東大教授（初）が忙しいので断ると直前に言ってきました（！）。

▼質問が多いのは講師の謝礼です。大っぴらには言えませんが、よそではもっともらっているはずの講師が（東洋経済の）経済倶楽部だからというので薄謝で了承くださるケースが多いように感じます。ありがたいことです。一定額以上を要求されればこちらからお断りします。元は会員の会費ですから大切にしないと…。

▼講演の内容はいいのに話し方にメリハリのない講師だと司会席で落ち着きません。事前によそで話を聞いて判断しているつもりなのですが、私自身、初めて話を聞く講師もいてそういうことがごくまれに起こります。逆にいい講演なのに前列に座った会員が居眠りを始めると講師がどう感じているかと思ってひやひやします。食後で眠くなるのはやむをえないとしても、今日は眠りそうだという気がしたら、始まる前に目立たない席へ移動していただけると助かります。（笑）

▼講演の最後に良い質問が出ると苦労も吹っ飛びます。そのようにして講師の経済倶楽部に対する評価が高まるのは喜ばしい限りで、質問だけも歓迎ですが、ご自分の意見が質問の前提にあればこの上なしですね。